

私のスキー靴 (2011.2.17)

私は年老いて喜寿を迎えた。今日と明日は天気が悪くスキー行はお休みなので、こころで私の人生を豊かにしてくれたスキーの思い出など書き留めておくことにしよう。

この冬は気象庁の歴史が始まって以来最も厳しい寒さが続いており、いろいろと苦労を強いられている雪国の人々には申し訳ない気もするが、私達はスキーを謳歌している。ちなみにスキー日数は昨日で 25 日となり、今シーズン 30 日は確かとなった。30 日を越えるのは人生二度目で、去年みたいに暖かい雨が突然降って雪が溶けてしまわない限り、スキー日数の最高記録を軽く更新することになりそうで楽しみにしている。

まず最初に書き遺しておきたいのはスキー靴のことである。「弘法筆を択ばず」ということわざは、スキー板には通用しても、スキー靴には当てはまらない。一人ひとりの顔や指紋が異なるように、足の形状や機能も同様に悉く異なり、平均的な出来あいの靴でぴったりと足に合うということは絶対にあり得ないのである。もっと大げさにいうと、昨日と今日とではスキー靴の履き心地が微妙に違うのが分かるようになった。その要因は気温などの環境条件の他にも、靴下の違い、筋肉などの体力の衰えや変化、気分的な老化など数え上げたらきりが無いほどであるが、出来るだけそれらのことを考慮に入れて靴を調整するように心がけている。日々異なるというのは生き物の命みたいなもので、スキー靴は履物ではなくて既に足の一部なのである。

2005 年に F さんに教えてもらって手に入れたサーモインナーシューズには、7 年間かかって自分の足に合わせた形状の インソール(靴中敷)をセットして使っており、朝バックルを締めると夕方スキーが終了するまで調整は不要であった。それだけ足と、いや身体や心と一体感のあるスキー靴はお金では買えない。自分で作るしかないのである。と言っただけでは理解してもらえないと思うし、大事なことなのでその経緯を詳しく書き遺しておきたい。

サーモインナーシューズはオープンで加熱してゲル状態となったところでシェル(靴)に入れ、バックルをちゃんと締めた上で、履いたまま常温まで冷却して足形をとる。足形にピッタリと合ったインナーシューズが出来上がるのであるが、そのままではスキーには使えない。インナーの素材は発泡プラスチックであり、吸湿しないし加圧により変形するのである。滑ってみると良く分かるのであるが、靴の中で足が前後に泳いだり、体重の掛かる指の付け根(指球)の辺りが凹んだりして足の動きがスキーに敏感に伝わらない。その欠点を補うために硬めのインソール(靴中敷)を使用し、前記欠陥を補う必要がある。

インソール(靴中敷)は 3,000 円ぐらいから 10,000 円を超えるものまでであるが、材質は吸湿性があり、皮みたいにある程度変形してくれるものが望ましい。私はインソール(靴中敷)の加工修正に 1mm 厚のコルクを使ったが、足の形状に合わせて切り取ったものを、中敷の裏面の拇指球の前に横向きに接着し、その上に重ねて足指と、指の付け根の指球全体を補強するコルクをもう一枚貼り付けた。この状態で数日間使用すると、中敷は湿気を吸って

変形し、足指と指球の辺りが必要なだけ凹んで足は靴の中で安定するのである。

サーモインナーシューズを使い始めてインソール(靴中敷)は三年目に完成したが、足の形は毎年変わるので、その変化に対応してインソール(靴中敷)も修正しながら使っている。昨年は左足踵の皮膚がんを小指ほども切り取ったが、それをカバーする右足は大きくなり、カバーされる左足は小さくなって驚いた。早速カンダハーの中村店長に頼んでサーモインナーシューズを足に合わせて焼き直したが、その前後のいきさつは私の HP にも書いたので参考にされたい。

(<http://kyoto.d.dooo.jp/sin9/blog3.html>)(<http://kyoto.d.dooo.jp/sin9/skii.html>)

サーモインナーの素材には寿命があり、3回の焼き直しが限度と言われている。私は7年間に5回焼き直しをして靴の寿命が尽き、1足目のスキー靴を諦めたが、インソール(靴中敷)はそのまま2足目のスキー靴にセットして使っている。その結果足と靴との間に余分な空隙が全く無くなるので、着用する時には細心の注意が必要である。2足目のスキー靴を使用した2日目に、タイツの裾に皺がよっていたのを気がつかずに、痛むのを我慢して滑っていたところ、皺に気がついた昼には手遅れで、その日一日大腿部の筋肉痛に悩まされた。

サーモインナーシューズは非常にシビアな靴なので履くときも細心の注意を払ってシビアに着用する必要がある。

